

勝林寺報

(三月号からのつづき)

「有量の諸相」として「無量光仏」を「智慧の光明はかりな」き、「無量光仏」と親鸞さんはおたたえになるのです。

「有量の諸相」というのはほかならぬ私の生きざまです。

この世のものはみな高き低き、大きき少なき、強き弱き、長き短きなど、すべて量ではかられます。量と量との比較や対立のうえに成り立つているのがこの世です。だから競争したり人を踏みつけながら生きているのが人の生きざまです。そんな浅間深い対立競争のなかに生きているものも、すべて大きくつんで照してくださる無量な智慧の光のはとけさまが南無阿弥陀仏なのです。

よとお知らせくださいつてはいるのです。

照してくださるというのはどのようなことなのでしょうか。

親鸞さんは「それはちようど、あらゆる草や木が、あかつきの光をあびるよう」とおつしやいます。(「光暁かふらぬものはなし」)

ことに山合いの日の出は急です。

黒々とそり立つ山の峰あたりから、ぬつと太陽がのぼります。

さつと陽がさすと、山合いの闇の深さに今さらながらおどろかされます。

そしてやがて陽がのぼるにつれて、大きな樹も小さな木も、谷間の石も枯れ枯れの雑草さえも、あかつきのおおきな光のなかによみがえり息ふきかえします。

そのような光を親鸞さんはまた「眞実明」とたえられるのです。

「眞実」の「眞」というのは「イツワリヘツラ

ワヌ」光だから真というのだとふり仮名をしてくださっています。どんなものもどんなものも分けへだてなく照してくださる光なのです。同時にこの光を身に受けるなかではじめてごまかしようもない私の闇が見えてくるのです。

「眞実明」の「眞」という字のよこには「カナラスモノノミトナル」という左訓がつけられております。「必ずものの身となる」とよむのでしようか。あるいは「必ずものの実となる」かも知れません。

おそらく両方の意味を含めて書かれたことばでしょう。

私の身になつて悲しんでくださる慈悲の光です。

この光のなかではじめて私のいのちは息づくのです。私のいのちになつてくださる光なのだよと示してくださいつてはいるのです。

非行少年収容訓練施設にいた十六歳の女の子の

うたです。

世をすね親に反抗し非行を重ねて終にここに入られれているこの子の前に、一週に一度面会におとすれる母親です。

ただいまつきしきほほえむだけ。

聞けばこの母、この子のあやまちを一身に背負つて、今までのくらしを何も彼もしてしまつたとか。

面会のたびにやせ細つていく母のほほ。

その母のさみしい、しかしこの私を信じきつてくれる母の笑顔のままでこの子はじめて自分の闇がみえてきた。申しわけない私と「血のにじむまでくちびるをかむ」のでした。

そしてこの子はこの母の光のなかで、あらたな人生を生きるからを与えられて、みこと更生していったということです。

右の通り臨時代議員会を開催いたします。

代議員会ご案内

日時 四月十三日 午後一時半

三月二十四日	葬儀
奥小谷 谷垣豊蔵様	
三月二十九日	
出石町玉井秀蔵様	

代議員様

勝林寺住職
門徒総代

葬儀

四月のことよみ

一日 兵庫教区新組画発足記念式典(神戸)
二日 田中勇一氏宅法事

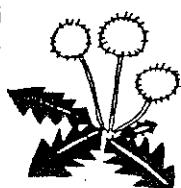
五日 中川信氏宅法事・八代光顯寺永代経
六日 永井かめの氏宅納骨法要・斎藤保氏宅法事
七日 山田健一氏宅法事・森友佐一郎氏宅法事・山田弘氏宅法事・平田重祐氏社研修会
足立尊醫夫氏宅法事

八日 玉田会定例布教・十六夜会講話
九日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
十日 玉田会定例布教・十六夜会講話
十一日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
十二日 出石組連合弘福講議員会
十三日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
十四日 谷垣賀澄氏宅納骨法要
十五日 岡山組「連研」講師
十六日 成田幹雄氏宅法事
十七日 敦森一男氏宅法事・横山梅乃氏宅法事
十八日 宮崎幸男氏宅法事
十九日 成田幹雄氏宅法事
二十日 玉田会定例布教・十六夜会講話
廿一日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿二日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿三日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿四日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿五日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿六日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿七日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿八日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
廿九日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事
三十日 長寧寺法事・山田恵一氏宅法事・大石正和氏宅法事

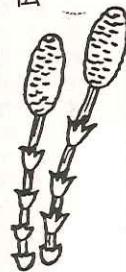
春季研観会	修桜	日時 四月二十九日(天皇誕生日)
研修会	受付	午後三時半(四時から研修)
研修会	研修	「法事のつとめかた」
観桜会(研修会後)	会費	男 千五百円 女 千三百円

佛婦からのご連絡

出石組佛婦連盟の総会(勝林寺当番)が六月二十三日に変更になりましたので「奉仕作業」は二十二日午後一時からお願ひいたします。



私のお念佛



春の彼岸も過ぎ、いぢだんとあたゝかい陽さしが森羅万象ごとくを照してくださる季節となつて参りました。

あります。
あじわいを新たにあげさせていただくことで
す。
南無阿弥陀仏。

煩惱もて 光をさうる わが身なり
ただ念仏を 仰ぐひぐらし。

一年生



つまり万物は、自分では色を出すことができないのです。

うつくしい色も、みにくい色も、自分で出すことはできず、光があたつて反射してはじめてわかるのです。

私たちも、もつたいない慈悲のあたたかなみ光を受けて、その人その人の色がつくりあげられているのですが、あたかも自分自身でつくりあげているような気もちでいるのではないでしょうか。私は、自分の色もつくり出せないくらがりのままのなかを、右往左往して生きているようにも思いました。

つまり万物は、自分では色を出すことができないのです。

うつくしい色も、みにくい色も、自分で出すことはできず、光があたつて反射してはじめてわかるのです。

私たちも、もつたいない慈悲のあたたかなみ光を受けて、その人その人の色がつくりあげられているのですが、あたかも自分自身でつくりあげているような気もちでいるのではないでしょうか。私は、自分の色もつくり出せないくらがりのままのなかを、右往左往して生きているようにも思いました。

怒った光（目）をあてると、相手からも怒った光（目）が反射してきます、あたたかな光（目）をあてれば、うれしそうな光が反射してきます。これは極く当たり前のことですが、しかし怒った光をいかにあてられても、やさしい光を反射することができないものなのだろうかと、自分がなさけなくなつてしまります。

私がいくら怒っていても、道がはずれていても

そうであるからこそ阿弥陀さまは、つねに無量光・無辺光などいろいろな光をあててくださっていることを忘ることはできません。

ふれを

山菜の、おいしい季節になりました。

兵庫教区
組画変更記念式典

(1) 路をゆがきます。（水にはつけません）
(2) 2~3センチに切りナベに入れます。
(3) 酒・しょう油・みりん・ダシの素で適宜な味つけをします。

(4) 塩づけサンショウの実と梅干とを適当に入れてことこととたきます。
火からおろし際に酢（ス）を少々入れ

「組」というのは本願寺派のいわば地方行政および教化のための組織です。この兵庫教区は従来、出石組を含む三十八の「組」が「かれておりました。

ところがこの「組」の区画は今から百年ほど前に定められたものであつたので、今の時代にはあわない不合理な面や格差などが出でてきました。またとくに部落差別がはつきりと組の区画のうえにあらわれている部分もありました。

そこで兵庫教区では、この旧い組画を一度全部解体し、現実に適合した、しかも同朋教団にふさわしい「組」をつくりなおす作業を三年間にわたつて続けてきました。

新組三十九が新らしく教化や同朋運動にむけて発足するための記念式典が四月一日神戸のボートビアホテルで開かれます。この式典にあたり勝林寺住職は組画変更企画室長であつたことに対し本願寺から表彰していただきました。

勝林寺責任役員 玉井秀蔵様
急逝
玉井秀蔵様が急逝され、
勝林寺責任役員 玉井秀蔵様
が急逝され、
親族のよう、歴代住職の支えとして
いつも陰のちからでいてくださつたかた
でした。

明治から大正・昭和と、いわば勝林寺の
親族のように、歴代住職の支えとして
いつも陰のちからでいてくださつたかた
でした。八十八歳であつた。

出石の町に城を建て、親善都市のことまでなにくれと親身に世話をすることにいそがしい。一生涯であつた。

そのなかで子をはぐくみ、たくさんの孫を一人一心配くださつた。

不器用な住職が眼をわずらつていたら、コンダクトの入れかたを、手をとつて何度も教えてくださいました。

勝林寺の

卷之三

The logo of the National Institute of Education (NIE) is a circular emblem. It depicts a muscular, nude male figure standing on a small boat. He is holding a large torch in his right hand, which is raised high. His left arm is bent, and his hand is near his chest. The figure is positioned in front of a crescent moon and a rising sun. The entire logo is contained within a thin circular border.

長い冬がゆるんで、但馬にも本格的な春がやつてきました。春の花々の芽もほころびはじめています。
三月二十七日、佐田の石田義雄さまが、つぼみのみごとな二種類の木蓮の木を境内に植樹してくださいました。
花開く日がたのしみです。